

京都で見たイタリア

東京大学 特任教授・建築学
松村 秀一
Shuichi Matsumura

卒業旅行

今年の卒業生は可哀そうだった。例年のような卒業式もなかったし、追出しコンパの類もできなかった。そして、卒業旅行で海外に出向くこともかなわなかった。新型コロナウイルスが世界中で猛威を振るうという異常事態だから致し方なかったとは言え、この機会損失は大きい。感染状況が改善され、いろいろな行動が自由になった暁には、是非遅れてでもやって欲しいものである。

今から四〇年ほど前、私は建築学科の友人二人とヨーロッパを旅した。約一カ月、卒業式にも出ず、格

安の航空便で往復し、一定期間ヨーロッパ中の鉄道を利用できる学生用の「ユーレイルパス」を携帯し、夜の国境越えで幾晩も宿泊費を節約した。今も記憶に残る自由で愉快な旅だった。

最近卒業旅行の行く先も多様化しているようだが、四〇年前、建築学徒の卒業旅行と言えば、九分

九厘ヨーロッパ行きだったと思う。文明開化以来の「本物はヨーロッパにある」というマインドセットが染みついて抜けていなかったのだ。とりわけ外せない国はイタリアだった。

実はこれはヨーロッパでも同じ。例えば、フランスの「ローマ賞」が有名だが、イギリス等他の国にも、建

築学徒や若い建築家の中から最優秀な者を選抜し、ローマに長期滞在させ、建築の古典を実地に学ばせるという仕組みが、十八世紀から存在した。ちなみにフランスの「ローマ賞」は、建築だけでなく絵画、彫刻、版画、音楽の分野にもあり、あの大作曲家ラヴェルが、若い頃何度もこの賞に応募したが、最後まで第一等を受賞することができなかった逸話には有名だ。

毎日芸術賞

さて、賞は賞でも今度は現代日本を代表する芸術賞についてである。今年の第六二回毎日芸術賞に我が



16世紀のパラディーオ建築を代表する「ラ・ロトンダ」(2002年撮影)

同級生青木淳君が選ばれた。一九三三年に建設され、今や現存する最古の公立美術館となった京都市美術館(最初の名称は「大札記念京都美術館」、そして現在は通称として「京都市京セラ美術館」とも呼ばれる)の優れたリノベーション設計、その芸術性が高く評価されたのである。長年の友人の慶事だ。私も早速行ってみた。

授賞式報告記事での青木君自身の発言の「今の時代に即した新しい意味を見だし、見方を変えさせるといふことに挑みました」という意図が、見事に実現していた。利用法を変えた大きな広間、東山方向の庭とのつながり等々、すっかり現代的で魅力的な場になったことが素晴らしいし、元の建物の時代ならではの仕上げ材料(主に石材)の豊かさ等にも改めてスポットライトが当てられたようになっていて、それも良かった。そして、そうした魅力の原点にあるのが、既存の建物の地下に当たる部分を、メインエントランス側の一階に仕立て直し、そこを新たなエントランス階にしたことだ。建物を

持ち上げたのではない。エントランス側の地面を下げたのである。ただ、現地に行くとも地面を下げたという印象はない。美術館前の広場全体に緩い勾配がついていてそれに身を委ねて歩けば、自ずとエントランスに吸い込まれるという仕掛けである。

デザインの源泉

この吸い込まれて行くような広場の感じ。思わず卒業旅行を思い出

した。少々スケールは違うが、世界

美しい広場と言われるトスカーナ州シエナの町の中心にあるカンポ広場である。この広場を中心とするシエナの歴史地区は当然のように世界遺産(一九九五年登録)である。青木君も卒業旅行で、市役所の建物に焦点を結ぶように緩やかな勾配がつけられたこの広場に魅了されたに違いない。実際、彼自身も今回の設計について解説した講演でカンポ広場に触れていた。

その同じ講演の中で、参照した歴史的な建築の話をもう一つしていた。十六世紀、ヴェネト州のヴィチェンツァ郊外に建てられた「ラ・ロトンダ」の名で知られる別荘建築である。設計者は今に至るまで建築界に少なからぬ影響を及ぼし続けるルネサンス後期の建築家アンドレア・パツラーディオ(一五〇八〜一五八〇年)である。パツラーディオの場合、このラ・ロトンダもそうだが、ヴィチェンツァの旧市街とその郊外にある「パツラーディオ建築様式」の二三邸宅が一九九四年に世界遺産に登録されている。これを卒業旅行で見ないとは考えられない。

青木君は、新しく一階が加わることで、建物の立面構成が妙なことになるかと思えた時に、これはラ・ロトンダのような基壇を持つ古典的な三層構成だと思ふに至り、「これでよし」と確信したとのこと。新しい京都の風景、その背後には卒業旅行で見たイタリアの風景が隠されている。やはり、今の学生にも卒業旅行には出向いて欲しいと思う。